
歩美と黒帽子の男性

さばら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歩美と黒帽子の男性

【Nコード】

N0254A

【作者名】

さばら

【あらすじ】

歩美ちゃんがふと振り向くと黒帽子を被った男性が表情を変えることなく歩いていました。一体、何を感じていたのでしょうか？

私は吉田歩美。

現在、少年探偵団の一員として力を合わせて事件を解決している。
ところで、私にとって心配なことがあるの。

黒帽子の男性が私をじっと見つめるのよ。

一体、何の目的なの？

お願い、私に怪しい目つきを見せないで……。

授業終了後。

ルリ子「バイバイ、歩美ちゃん、哀ちゃん。」

歩美「バイバイ、ルリちゃん。」

哀「明日の音楽発表会頑張ろうね。」

ルリ子「う・うん。」

帰り道、私は哀ちゃん、コナン君、元太君、光彦君、純君、みどりちゃんと家に向って歩いていった。

哀「最近、吉田さんの表情が変だけど何かあったの？」

歩美「実はね……………」

コナン「まさか……………!!」

光彦「わかったのですか、コナン君？」

そのとき、コナン君の推理が的中した。

赤井「……………（歩みを睨む）。」

歩美「……………（怯）!!」

赤井「……………（何度か見たぜ、あの少女（歩美）を。一緒にいる仲間は楽しそうだが。しかも、工藤新一と宮野志保も一緒だ。）」
みどり「どうしたの、歩美ちゃん？」

歩美「あの黒帽子の男の人、私が気になるのよ。でも、一度も話しかけられたことがないわ。」

哀「あの黒帽子の男（赤井）はいつもそうだね。気になる人を遠くからじつと見詰めながら行動するのよ。」

元太「きつと歩美に好感を抱いてるんじゃないのか？」

コナン「元太、簡単に言うなよ。」

歩美「一体いつまで私の前に現れるのかしら？」

私の心配な表情はまだ消えなかった。

次の日曜日、私は阿笠博士と少年探偵団でトロピカルランドに行った。

歩美「可愛い、あの人形！！私に近づいて来そうだね。」

哀「本当。童心を忘れさせない表情ね。」

阿笠「おや、最近元気が無かった歩美君の表情が戻ったわい。」

元太「おおー！！恐怖から解放されてほっとしたんじゃないのか？」

コナン「元太、歩美ちゃんはあるとは別の原因で疲れていたんだよ。」

光彦「今日は、普段溜まったストレスを存分に発散しましょう！！」

歩美「まず新しいアトラクションへ行きたいわ。」

阿笠「歩美君、乗り気じゃのう。」

意気揚々としていたとき、またあの男の人が現れた。

赤井「……………（歩美を睨む）。」

歩美「……………（怯）！！」

コナン「……………（また現れたな）。」

哀「……………（ふふふ（笑）。いつも通りね。）」

赤井「……………（今日は研究者風のおっさんと一緒だ。あのおっさんが鍵を握っているだろうな。簡単に近寄れそうもない。）」

光彦「歩美ちゃん、大丈夫ですか？」

歩美「ふー、ふー！！何ともないわ。だって、みんなが守ってくれてるのよ。」

コナン「ああ。力合わせてこそ少年探偵団だよ。」

1ヵ月後の日曜日、私はお父さんとお母さんと一緒に郊外のレストランへ行った。

歩美「随分並んでいるわ。」

歩美の母「わかるでしょ、歩美。このお店は人気があるのよ。」

歩美の父「子供からお年寄りまで誰にも利用しやすい店だよ。俺も長居したいなあ。」

歩美の母「でもお父さん、騒いで迷惑をかけちゃだめよ。」

歩美の父「わかってるよ!!」

お父さんとお母さんが会話する中、私は入り口方向を見つめた。

店員A「いらつしゃいませ。」

赤井「……………（歩美を睨む）。」

歩美「……………（怯）!!」

歩美の母「歩美、大丈夫？」

歩美の父「表情が悪いなら無理して食べなくてもいいぞ。」

歩美「心配しなくていいわよ。（赤井は）別に悪い人じゃないわ。」

赤井「……………（俺を悪く思わない人がいると嬉しい。今日は両親と一緒にか？俺も両親の愛情をもっと受けてればよかったのに。）」

店員A「お客様、1名様で？お煙草はお吸いになりますか？」

赤井「はい。喫煙席をお願いします。」

店員B「吉田様、6番のお席へどうぞ。」

歩美の父「はい。」

私達が禁煙席に座る中、あの男性は1人喫煙席に座っていた。

歩美の母「さつきから黒帽子の男性は、ずっと煙草を吸っているわね。」

歩美の父「話す相手がなくて寂しく無いのか？」

歩美「しっ!!そつとしてあげてよ。このお店で寛ぎたいのよ。」

赤井「……………（歩美を睨む）」

歩美「……………（怯）」

赤井「……………（彼女（歩美）の言うとおり、俺には静かなレストランが似合うけど、たまには誰かと会話したいなあ。）」

歩美の父「失礼します！！」

店員C「はい！！ご注文は何になさいますか？」

歩美の父「ミックスステーキ、スパゲティミートソース、シーフードドリアをお願いします。」

店員C「かしこまりました。」

歩美の母「お父さん、大丈夫？」

歩美の父「心配しなくていいよ。なんとか予算で収まるだろ。」

暫くして、私達が注文した食べ物が来た。

店員C「お待ちどうさま。ミックスステーキ、スパゲティミートソース、シーフードドリアです。」

歩美「わく、おいしそう！！いただきます！！それに、可愛いお皿ね！！」

歩美の母「これなら、女性客も喜ぶわね。」

ステーキ「じゅく！！」

歩美の父「ひゃく！！ステーキの音を聞くだけで食欲が沸くなあ。」

赤井「……………（歩美を睨む）！！」

歩美「……………（怯）！！」

赤井「（ステーキのいい匂いだ。俺が不遇の時代に憧れた食べ物だ。ドルフィンスのハドソンも同じことを言ってたな。）」

歩美の母「歩美、大丈夫？」

歩美「お母さん、気にしないでいいわ。きっと、お父さんの食べるステーキが気になったのよ。」

歩美の父「ああ。長い間美味しい物を食べてなかったんだよ。お父さんもこんな時があったよ。」

赤井「すみません。」

店員D「ご注文を伺います。」

赤井「ロースステーキセットをライスでお願いします。それに、ドリンクバーを付けて下さい。」

店員D「かしこまりました。」

歩美「私、水入れてくるから。」

歩美の母「いいわ。すぐ戻ってきてね。」

歩美「うん。」

私が水を入れていた最中、あの男性はグラスにドリンクを入れていた。

赤井「……………（睨）！！」

歩美「……………（怯）！！」

赤井「……………（1人で水を入れ、俺に気を配り偉いなあ。彼女は、良妻賢母になるだろう。）」

歩美「……………（いけない。急がないとお父さんとお母さんが心配するわ。）」

ある雨上がりの日、私達は西久保町で刃物を持った男を追っていた。元太「行けねえ！！あのおっちゃんがいねえぞ！！」

コナン「ちくしょー！！どこに行きやがったんだ？」

光彦「このまま迷宮入りするのは絶対嫌です。」

みんなが戸惑う中、私が咄嗟に1つの手袋を見つけた。

歩美「あっ！！手袋が落ちているわよ！！」

哀「内側には血が付いているわね。この時季で手袋をしているのは不自然だわ。」

コナン「間違いない。あの刃物男の物だ。ひょっとしたら、西久保駅のトイレにいるんじゃないかねえのか。」

哀「別人になりすますつもりね。でも、無駄よ。」

刃物の男を捜そうとしたとき、また黒帽子の男性が姿を現した。

赤井「・・・・・・・・（睨）！！」

歩美「・・・・・・・・（怯）！！」

哀「・・・・・・・・（また現れたわね。）」

元太「歩美、どうしたんだ？」

歩美「大丈夫よ。犯人を捕まえるよりは恐くないわ。」

赤井「・・・・・・・・（地下街に刃物男が逃げ込んだ？これは、大変な騒ぎだろうな。）」

私達は、大急ぎで西久保駅へと走った。

ついに、駅ビルのトイレ前で刃物の男を発見した。

コナン「もう逃げても無駄だよ。あんた、杯戸町のパチンコ店での強盗殺人犯だね。証拠は、この手袋さ。」

犯人「そ・そうだよ。俺とあの店の店長とは金銭トラブルを抱えていた。借金を断られた腹いせだったのさ。」

歩美「酷いわ！！こんな単純な理由で人を殺すなんて！！」

哀「あまりにも短絡的ね。死んだからって何も手に入らないわよ。」

犯人「・・・・・・・・う・う・う！！」

その時、偶然目暮警部と高木刑事が通り掛った。

歩美「警部さん、こつちよ。」

目暮「歩美君、ついに小暮龍一を見つけたのか？」

コナン「今なら大丈夫だよ。説得されて大人しくなったよ。」

高木「失礼します！！小暮龍一だな？」

小暮「は・はい！！」

目暮「強盗殺人と3件の強盗容疑で逮捕する。話は署で聞こう。」

赤井「・・・・・・・・（睨）！！」

歩美「・・・・・・・・（怯）！！」

赤井「・・・・・・・・（地下街で被害が出なくて幸いだ。彼女を見ると、悪い心が和らぐだろうな。）」

哀「（あの男の目が優しく見えたわ。）」

コナン「（怖そうに見えても、心は優しいんだろうな。）」

歩美「よかったわ。無事に解決して。」

元太「もう昼かよ。腹減ったなあ。」

歩美「元太君と一緒に行動すると、いつものことだわ。」

元太「こら！！」

別の日、私達は蘭お姉さんと園子お姉さんと下校中だった。

歩美「あゝ！！暑い！！」

光彦「これで、また熱帯夜ですね。」

蘭「寝苦しい夜から脱したいわ。」

園子「また涼しい所に行こうかしら？」

コナン「（そのときは、園子にお任せだな。）」

蘭「そう言えば、歩美ちゃんをずっと気にしている人が歩いているわね。」

歩美「大丈夫よ、蘭お姉さん。あの人なら……。」

そんな矢先、私達とすれ違いであの男性が現れた。

赤井「……………（睨）。」

歩美「……………（怯）！！」

蘭「……………（何よ、私まで見つめているわ。）」

あの男性は、私だけでなく蘭お姉さんまで見つめいた。

赤井「……………（今日は、高校生の2人の女と歩いているな。）

本当に姉妹のようだ。のおや！！黒髪のロングヘア（蘭）は、見覚えあるぞ。そうか。工藤新一の彼女だな。しかも、ニューヨークで髪型は違うが工藤新一の親戚のよく似た女がいたよな。彼女達3人のいる場には、太陽が当たるだろうな。俺には出来ないことだ。）

「
蘭「……………（嫌だ）！！私が真由子さんに見えたの？いくら似ているからって！！」」

コナン「蘭姉ちゃん、歩美ちゃん、どうしたの？」

蘭「別になんともないわ。よくあることよ。」

歩美「私を羨ましく思ったのよ。表情が落ち着いてきたからわかるでしょ。」

コナン「ま・まあな。」

8月中旬、今日は折尾さん家の秀一お兄さんが帰ってくる日である。私達は、今や遅しと帰りを待っていた。

歩美「まだかしら、秀一お兄さん？」

折尾「心配しないでいいよ、歩美ちゃん。寄り道はいつものことだから。」

千代子「遅くなるなら連絡位入れればいいのに。」

歩美「……………（怯）！！」

秀一「ただいま！！」

折尾「お帰り！！」

千代子「お帰りなさい、秀一。ご苦労様！！」

カン太「オカエリ、シュウイチ。オカエリ、シュウイチ！！」

秀一「カン太も元気だったか？」

歩美「あっ！！秀一お兄さん！！」

千代子「秀一、何その帽子？」

秀一「実は、工場近くの店で見つけた目玉商品なんだよ。“似合う似合う。”と同僚が盛んに言うもんでね。」

歩美「あっ！！黒の帽子だわ！！私同じ帽子を被った男の人を見たの。秀一お兄さんも似合うわよ。」

秀一「照れるよ、歩美ちゃん。」

折尾「これからは、秀一のトレードマークになるだろうな。」

秀一「父さん！！」

歩美・折尾・千代子・秀一「は・は・は・は！！」

黒帽子の男性は、私と会ったことで充実さを取り戻したかも知れない。

このまま、平和な日々が続くといいわね。

私にとっても、あの男性にとっても。

- 完 -

（後書き）

歩美ちゃんと赤井氏の表情がホッとしていて、暗さから明るさへの変化を物語っています。

最後はオチです。

名前が同じ折尾さんの息子さんに被らせようと思いつきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0254a/>

歩美と黒帽子の男性

2010年10月31日04時53分発行